# 詩作ノート無明のふるさと　　2004/8/20 起

※　石を抱き月下の杏林にはぎしり続ける臨月の蛇
　　その無明の痛みは般若のものだ

※　私は無から生まれた　だから無はふるさと　いつもはじまるところ

※　生死の中の雪降りしきる

※　私がもうひとつの名刺を作るとしたら「詩人」という
　　肩書きを小さく入れたい　だがあの高潔な詩人の名刺には
　　肩書きはなく　名前すら入っていなかった

※　水面を自在に動き回るみずすまし
　　嘘や笑いの波紋の底で　静かに色づく水の民
　　無名の人たちの秋がみえてくる

※　信ずるに足りぬ自己を去りて　究極の他律として　きみを始めよ

※　いつでも市民に帰る覚悟　議員のたたかいと
　　ただの市民のたたかいの重さが　常に匹敵していますように

※　死ねば死にきり　自然は水際だっている

※　簡単に言葉するな今　政治の言葉は寒くしぶいて　とどまることを知らぬ
　　本当の輝きのためには　闇を蓄えねばならぬ

※　夏風邪のように凍った炎　古代縄文の火炎土器は
　　その静まる炎天の壷の底に　数千年の闇をとどめて立つ

※　いま煙立つ雪炎の　海を行くごとくなれど
　　われより深く死なんとする　鳥の目にあへり

※　無明とは輝く闇ではないか　無は火（、、、、）の上に舞っている

※　われはいま辺際にありて橋とならん　飛ぶことを断念して観ることだ
　暗きいのちの３６億年　河床を渡る樹雨の詩

※　ぼくはまださりげなく　コスモスの風に吹かれて行く
　遊民たちの秋にはなれない

**急ぎのモード**

車は見過ごす
目的に合わせた眼の角度
時間に合わせた急ぎのモード
走り続けながら見過ごしてきた
不条理をいっぱい

轢かれた猫
言葉を掛けたかった懐かしいあの人
言い足りずに飲み込んでしまったやさしい言葉
ぶつかりそうになった人の叫びと睨む視線

解決しないクリーンセンター事件　鹿沼の泥沼
何という草花　咲き誇る沿道の歓声　美しい森
驚いて逃げた　いきものたちの息遣い

見過ごしたものの
声や視線が消えない夜は
２５時以降に降りていく
滑り棒や縄梯子を使って
バンジージャンプは身が持たぬから

必ず明日に帰れるしるしを携えて
連れ合いのぶつくさ言う網も携え
ゴミ箱に積もった黄ばむ言葉を
拾いにいく

## 還暦　Ⅰ

時は満ちて滝となり
刻まれた心という字を消していく波
打ち返す潮の攻勢
ご破算で願いましては
永遠の今よ　心地よく
やがて誤算に

還暦は引き潮だった
海の底には積もる６０年のアクタモクタ
宛名を探りだし　ファイルを開き
打ちあがってきた蟹や貝を標本にし
海草や流木を拾い
それらで言葉を紡いでいく

海鳥の群れて鳴いている引き潮
遠のいていくブイ
午後の光を揺曳する遠い波頭
引いてゆく人の影

内蔵の壁が開かれ
棲みついた虫けらがうごめいてひび割れ
閉ざされたまま
わたしの還暦は
痛むことから始まった
（２００４・９・２６）

## アブラムシ

野良仕事の大人の周辺にはアブラムシがいた
ちょっと便利に手伝わせられたり
邪魔だからあっちへ行けといわれたり
勝手に遊んでいればいいと
飲み込むまでには時間がかかった

まだ早い少年のころ
背伸びして
本当は一人足掻いていた

夏休みが始まったばかりの陽光が
麻畑一面に広がり
葉裏を透かして白く騒いでいた
真新しい「夏休みの友」を開くと
インクの青い匂いがした
（今日は日記のページになにを書いてやるか）

紙芝居のアブラムシは駄目だった
チャリン　チャリン　遠くから鉦を鳴らして
焼け付く往還道をやってくる
アイスキャンデーの水色の旗
荷台におおきな白い箱積んだ自転車を追いかけ
金を払って買ってくるのが大仕事

子供の遊びの中にもアブラムシがいた
缶蹴りの鬼になっても役は御免
ほんとは鬼の見習いでも
アブラムシとは誰も言わない
ルールがあった

**往還相**

この年になるまで「おーかん」が往還という
立派な仏教漢字だったとは知らなかった
往くだけの道は往還道ではない

祖父母が使っていた方言だったに違いないが
「おおかわ」・・・一級河川と
「おおみち」・・・県道が混同していて
人が死に怪我をする大人の社会
危険な空間らしい音がした

お一かんが県道に昇格したのは
祖父母が死に
子供がどんどん東京へ集団就職して
わら屋根のうちがトタンや瓦になり
薪がプロパンになって
メグロやヤマハのオートバイや
スバル・パブリカが走るようになったころからだ

物が流れ人が行き交い
大雨には水があふれ
雪の日は畑や田圃と見分けができず
キャンデー売りの自転車がやってきたり
チンドン屋や紙芝居や
ときたま鉱山のマンガントラックが
土煙を上げて行き来した
蛇やトカゲがゆっくりと横切り
蝶々やイナゴ・バッタ
道端を少し入れば野糞もできて
学校帰りの道草にことかかなかった

お一かんには往きと還りの相が在る
この年になるまで
「お一かん」が往還という
立派な仏教漢字だったとは知らなかった

**水車小屋　（２００４・１０・０６）**

雪は薄墨に暮れて
川向こうの水車小屋で
米を搗く赤い母がいる

１３回忌を迎えても
大輪のまわるギィー音に包まれて
粉にまみれた母がいる

雪が縞模様に曲がりこみ

電線がブルルーンとたわみ
まだ帰らない母がいる

**垢すり　（２００５・３・１３）**

まだ年は若いのに
毎日　なにしているのですか
充電　しているところですか

聞かれればいまは正直になれる
「いや２０年の垢おとし
　わたしの詩作は垢すりなのです」

垢抜けしないと言われてきた
自生えのほんものの垢
そのうえにまとった
嫉妬深い名利の垢の２０年を
せっせと纏った政治の垢を
灰汁抜きしてから垢すりすると
黒くよじれてコロコロボロボロ
詰まった下水の澱のようだ

温もったなじみの垢は心地よい
新旧の垢の見分けもつかなくなり
垢だらけといわれて気づいた垢枕

ヒトの細胞は７年で全部入れ替わる
すると２０年の政治の垢は
三重塗りの厚ものに違いない

**桜・クラゲ　　２００５・４・１９**

桜に埋もれた紫雲山千手観音堂は
桜の傘に覆われたクラゲの内臓のように
全山のちょうど臍の位置にあった

泡立つ４月の乱反射をさえぎり
ハマグリ色の空には
産卵する天蓋の
巨大クラゲが揺らいでいた

人々は観音さまの臍の緒を
ひいては撓ませ
自慰の鉦を鳴らしては
桜の花に付きまとう
血潮の匂いを清めていた

錆びた記憶に響いたようだ
水の母よ
海の月よ
１０億年のいのちの揺らぎよ

導師のお経より不遜な
言葉使いをする自由
いま一人佇んでいる桜の下の標柱のように
ぼくの足はこの一瞬に深く痺れてくる

**桜の花が終わるとき**　　２００５・４・２０

桜のコンサートは聴きながせ
ついに座る場所のない都市だった
還暦の綴じ込みはすばやくすませ
太陽を回りこむ彗星の軌道にのって
弓なりにしぼって弾きだされよう

踊り場の桜見物はほんの一瞬
後ろ髪惹かれることがあるなら
それが詩
またたいている俺の血

言葉のかけら
やっと見えてきたうす紅色の戦士よ

桜の花が終わるとき
目に沁みる風の痛さが
彼方からやってくる祝祭の証
貧しさのなかで腐食する水に
錆びやすい水にすむいのちに

種を宿している自慰の桜に
人は自ら決することなしに
次の世代に軌道することはできないと
懐かしい人々に送る
丁寧な弔辞は頼んでおけ

**水煙**　　２００５・９．１３

渋茶を飲む時間が整ってくると
なつかしい未来のほうから
老いのわがままな特権のように
ゆったりとした光が漂ってくる

おれという今日の二律背反は
しばしそのままにして
そのうち渋茶をすすり終えたら
縄にして軒端につるして表札にしよう

湯面に映ることばのほのお
それを詩のことばにまきつけて
あとは空の器の匂いを吸い込み
こっそり水煙のように昇天してみる

ジーちゃんなにしてんの
いっしょにあそぼ
絵本を持った
まごのこえが迎えに来る